

---

# 鋼のように愛して ~ 燃えさかる内燃機関 ~

” 太った猫 ”

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鋼のように愛して　　～燃えさかる内燃機関～

### 【Nコード】

N8569B

### 【作者名】

” 太った猫 ”

### 【あらすじ】

機械人形とのラブコメディ？ヒロインの本体は鋼鉄の機関車！！  
あなたに逢いたくて私、来ちゃった。

## 序

自我を持つロボットの開発が夢物語でなくなった時、熱く議論された事がある。その開発に多額の費用をつぎ込むよりその費用で多くの人間を雇え！ つまりはそのような無用なものの開発は即刻中止すべきものだという主張と、それは人類の夢と希望であるという主張が真っ向から対立した。

理論的な構築はすでにそれを夢物語では無くしてはいたが、開発そのものには未だ時間がかかるようであったし、その存在の現実への進出は人間の存在そのものにとって脅威を孕むものであった。

議論は決着を見ぬままに長引きそうであったが、議論そのものの決着を見ぬままにその存在は一人の天才とそこに多大な利益を見いだした企業によってあっさりと世界に実現した。

これが現在、巷ちまたにあふれている自動機関出現の経緯である。

## あなたに逢いたくて／鋼鉄の乙女1

「ねえ、来ちゃった。アナタに逢いたくて、我慢しきれなくって、私……」

流れるようなブロンドの髪、少し潤んだ鳶色とびの瞳の持ち主はそう言っ、恥じらうようにバラ色に頬を染めた。それはありふれた恋人達の一風景、その言葉を発するものが鋼鉄くろがねの機関車でさえなければ。

彼は早鐘のような自分の鼓動を認識していた。轟音とともに問答無用に学生寮に現れた鋼鉄の機関車の存在に。その眼前に映し出された金髪の美女の立体映像ホログラムに見覚えはなかったが、彼女の身体にくたいの方には、確かに見覚えがあった。空気抵抗のことを考えながらも、意図的に残された旧時代的な装飾品、彼女なりの自己主張のカタマリというべき騒々しさの中の一つの洗練された統一感のある機体ボディのペインティング。彼女の名前はフィアナ、教授プロフェッサー、R・J・ノイマンの娘、自動機関だ。

『まさか、ここまでやるとは思わなかった』

## ―鋼鉄の処女―

1

彼は失望していた。

「ハイ、そこでターン」

大広間を埋め尽くす人、人、人の波の中、天井から降り注ぐ音の洪水に流されないよう目の前のちよいと可愛らしげな女の子にステッ

プのリードを取られながら、彼、仁科<sup>にしな</sup> 秀幸<sup>ひでゆき</sup>は失望していた」  
『ここは最後の聖域だったハズだ。』それがなぜ？、わかっている。一言でいえばそれは時代の流れというものなのだ。自動機関<sup>オート・ワイカー</sup>という名前の便利な労働力を手に入れた。これが、その代償なのだ。しかし、ここは最後の砦<sup>とりで</sup>だったはずだ。

人間の運転士の！！

## 鋼鉄の乙女 2

それは晴天の霹靂へきれきだった。

「諸君、機械の全ては人間が支配すべきだと言う愚かしい幻想に我々は取り憑つかれていたのだ」妙に装飾の華美になった講堂での学長の第一声がそれだった。それは旧時代的な人間の運転士を育てる教育機関の学長が決して発してよい言葉ではなかった。

「…我々は人間の運転士という存在に固執しすぎていた。機械の全ては人間が支配すべきだ？ この仕事こそが聖職？ ナン、センスだ！！ 我々は今こそ古き概念こんごんを脱ぎ捨てて新しく着心地の良い理想りゆうをまとおうではないか！ 自動機関とともに歩む未来は、今まで以上にすばらしいものを我々に与えてくれると私は確信する！！」最後に放たれたその言葉は無機質の冷たさをもって呆然としていた彼、仁科にしな 秀幸ひでゆきの夢を断ち切った。

それからの事はあまりよく覚えていない、校長の裏切りとも言える発言に場が沸騰しかけたとき、それを見計らったかのように講堂の裏から現れた少女達の一人に手を引かれながらダンスのステップを踏んでいる現実などどこか遠い出来事のようにだった。

少女達はどれも美少女、とまではいかないもののその年齢にふさわしい活気に満ちあふれた肢体を持っていた。それらに野郎どもばかりで閉じこめられこの数年間を過ごしてきたこの学生達は抵抗する術を持ちえなかった。

「諸君らには、これから異性とのコミュニケーションというものを学んでもらう」

「知つての通り自動機関の性能を十二分に發揮する為にはその機械<sup>メカニ</sup>人核<sup>カルコア</sup>と親密になる必要がある、その来るべき未来の為に、さあ、踊り賜え」

校長の演説が続く中にあちらこちら不器用な男達<sup>ども</sup>の囁きが聞こえる。

その情景を満足げな表情で見下ろし、彼はその次の準備に入ろうとした時にそれは起こった。

### 鋼鉄の乙女 3

彼女は失望していた。ろくな人間ではないのだ。わかつてはいる。それが贅沢な望みだという事は。

自動機関は、思考する機械だ。自動機関は生きている機械だ。自動機関は感情の機械だ。自動機関は成長する機械だ。

これらが彼女たちを紹介する際に必ず使われる言葉だ。しかし、自動機関がその機関の能力を最大限に発揮するためにはコーディネーターと呼び慣わされる人間の運転士を必要とする。つまり自動機関は人と出会って、初めて自動機関たり得る。その出会いというものは自動機関にとって運命的なものなのだ。だから彼女は、多くの自動機関が思い描くようにその出会いに淡い恋心を抱いていた。しかし目の前の現実<sup>まじか</sup>は、そういう期待<sup>おぼしめし</sup>をこな微塵に打ち砕いてくれている。

自動機関は自動機関たり得る為にコーディネーターを必要とする不完全な自律機関である。という言い方もある。なのに彼女のパートナーとなるべく現れた男はその彼女の不完全さを補うための全てが欠落しているといえた。

まず、その絶えず浮かべ続けられるその愛想笑いが気に入くわない。その笑顔の下で私を嫌悪しているという雰囲気すら隠す気もないのか、この男は、そしてさらに、やめた。数え上げればきりが無い。ここまで相性が最悪な男を私のコーディネーターにしてどうしようという気なのだ彼らは！！ そういえば彼らもだ。なんなのだこれは、確かに私がいるこの場所は人間の運転士を未だ育てているという時代錯誤も甚だしい教育機関の講堂の裏だ。しかし私に危害を与える



不審者を排除する為と言いつつその周りの男達の無数の銃口がこちらを向いているのはいったいぜんたいどういふつもりなのだ!!  
そこまで私に対する警戒心と不信感を露わにして本当にいったいどうするつもりなのだ!!

お父様、私は絶望に身を焼かれそうです。ため息をつきつつ彼女が、その現実に迎合しかけたときにそれは起こった。

## 鋼鉄の乙女 4

「ここは最後の砦だったはずだ」仁科秀幸が外の男の信条と行動に同意するかどうかは知らないが男は先刻、彼が思っていたことを機械化された拡大音声で絶叫した。

「我々はこの機械化された”世界”に断固として反旗を翻す”自然人”である。ここは我々と思想を同じくする者達のその最後の最後の牙城であつたはずだ。あの輝かしき過去、機械は我々の忠実な手であり足であり、奴隷であつた。その上に君臨する王を造り出すための施設であつたはずだ、ここは。だからこそ、我々は君たちを榮えある同志とみなし、陰となり日向となり協力を惜しまなかつたはずだ。それなのに、ああ、それなのに、この所業は！？ この仕打ちは！？ これは我々に対する純然たる裏切り行為だ。文明の行き着く先？ 時代の流れ？ その潮流の中に毅然と立つ姿こそが先人達の想いを受け継ぐ先では無いのか？ この裏切り！ 大いなる背信！！ この人と機械との関係の理想の墮落した姿に我々には失望する！！ 裏切り者には制裁を、理想の敗残者達に永久の安らぎを！！」その宣言と詰めかけた自称自然人の呼びかけが終わると同時に問答無用とばかりにその破壊を現実化する武器が壮大で勇壮な曲と共に打ち込まれていく。

男の言葉がだんだんと意味を無くし、喜劇的ともいえる哄笑となるにつれてその破壊は広がっていった。

講堂の中は混乱の渦に飲み込まれていた。最初、その喜劇的な行動に対して無責任に嗤わしたてていたものも、事が現実の破壊という段階に至ってはじめてその重大性に気づいたようであった。あるものは硬直し、あるものは泣き喚く中、生徒の安全を護るといふ名目

で講堂の裏にいた武装化兵らの行動は遅速<sup>かれ</sup>だった。

なぜならこれは予想されていた災害ではなかったからだ。災害の方向は目の前の機関車<sup>コレ</sup>であるはずだったのだ。そのために彼らの行動は遅きにすぎた。

## 鋼鉄の乙女 5

そこに描き出された風景は、悲惨の一言に尽きた。死者こそまだ出ていないものの、血と悲鳴がそこかしこを埋めていた。

呆然とするその中に、場違いなファンファーレが響きわたる。その音とともに講堂の奥の暗闇から現れたのは、この場には不似合いな装飾のほどこされた黒い機関車だった。それが、中途半端に敷かれた儀礼用の線路の上を、もどかしいほどにゆっくりと走ってくる。

「乗りなさい！」鋼の機体から響いたその音声はまるで救いのようにその場にいる者達に木霊した。そして、そこにいる者達が、次々と自力で、あるいは人に手を貸しながら、未だ破壊の続く中、その中に次々と呑み込まれていく、そうして、彼、仁科秀幸は自分の未来を閉ざしたその鋼鉄のカタマリへと呑み込まれていった。

「初めまして、そして、ようこそ私の中へ」彼が通されたのは心臓部だった。そして声とともにその壁面に灯りがまるで彼を誘導するかのように瞬く、幻想的なその光景に見とれるようにして彼は歩を進める。そして、その手が行き止まりと思われる壁に触れた。途端、彼の体を包み込むようにして壁が迫ってきた。個性的とは言い難い悲鳴とともに彼はその中に吸い込まれていった。

気を失っていたのは数秒の事だろうか、暗闇の中、居心地の良い椅子に座らされ、目の前では緑の信号灯が明滅している。引き寄せられるように彼がそこを向いたのをまるで見計らったかのように声が響く。

「個人情報登録を開始致します。貴男の名前を入力してください。

…心拍数に多少の異常が見られます。落ち着いて下さい」「ぼう、と  
したまま、問われるままに自分の名を告げる。

「OK、パーソナル スキャンングの走査を開始します。指紋照合、虹彩チエック  
OK、声紋照合、個人情報の登録が終わりました。では、目覚めの儀式  
キヌを、あなたの想いをその口唇に！！」

そして彼と彼女との儀式は成された。

「OK、仁科 秀幸をRD505、”絡みつく蛇”のマスターとし  
て認証します。リンク開始、同調率、10、20、30、50%を  
越えました、80%、私を信じて、そして私達を信じて、MAX！  
！Ki・A・I・System発動 Aura感知システム、シ  
グナルグリーン、変動フィールド展開開始、座標軸範囲指定開始、  
クリア、未来値設定、クリア、固定します。Your Orde  
ris Mine（貴男のお望みのままに）！！」

めのまえ

外の光景が多重写しになり、そのうちのひとつが選択された時、  
彼の目の前にはその光景が当たり前のように広がっていた。そこ  
は先ほどまでの穏やかな時流ときの続きが当たり前のようにそこでは展  
開されていた。

その青空の下で静な声が響く「我が名は絡みつく蛇、原初にその  
願いと引き替えに禁断の果実を渡した者」

## 鋼鉄の乙女 6

「…、以上が先日の方の事件のあらましです」オペレーターの報告が終わるとともにそれまでかろうじて沈黙を保っていたテーブルのあちらこちらからため息とも驚嘆ともとれる吐息が漏れる。その中でさらに淀みのない女性の報告が続き、スライドが次々と映し出される。

「RD501：人造美人、世界初の自動機関にして現在巷にあふれる一自動機関（オート・ワーカ）の原型、名前通り世界中に彼女の子らが氾濫することとなったきっかけとも言える機体です。」

RD502：たくり寄せる意図、遠隔操作システム、蜘蛛の糸を搭載した初の機体、これによって一人の運転士によるユニットマシンの多重独立運行が可能となりました。

RD503：燃え盛る情熱、外層交換機能、かぼちやの馬車により制作者の手を離れた自己変革システムを可能としました。

RD504：機槍天女、曲率変換機関、スレイプニルの搭載により、あらゆる曲線を直線として走破することが可能、これにより地表を走行する機関としては最速を叩き出す事に成功しました。以上四機体とも我々に多大なる利益をもたらしました。

しかし、これら4機体とも我々にとって看過できない事態を引き起こしたのもまた事実です。続いて、こちらをご覧ください。これが問題のRD505、開発名”絡みつく蛇”に搭載されているシステムです。この多機能化工場、”七人の小人”は、単純に自己の破損部品等を速やかに修復させるためのものとして働くものと思われ、ていきましたが、その秘めたる機能は最悪です。これまで発生した事

件など、この機構システムの発生に伴う事態に比べれば些事にしかすぎません。このシステムの発動の規模によっては最悪、現人類の滅亡の可能性すらあるのです」

次々に映し出されるスライドの最後にはあの黒鋼くろがねの偉容が映っていた。

「……………」沈黙がその部屋を支配した。

「あれのパートナーにはこちらの息がかかった者を送っておいたはずではなかったかね」

「不測の事態により、コーディネーター運転士はこちらの用意した者ではなくなりました。すでに正式な登録も彼女、失礼、メカニカルコア機械人核、固有名称フィアナにより済んでいます。詳細については手元の資料を御覧下さい」  
一瞬、安堵しかけたその場はオペレータの言葉によって遮られた。

「ご存じのように自動機関オートワーカー自身が決めたコーディネーター運転士をこちらの都合で合法的に変えることはいくつかの例外を除いてほぼ不可能な状態となっております」  
「言って彼女はその場を支配する主に向かって沈黙した。」

「…彼に、連絡したまえ」  
再度の沈黙の中、その閉幕はその言葉によって為された。

## 暴走する鋼の乙女

彼女は上機嫌だった。その様子は彼の居る運転室に流される甘<sup>ミ</sup>つた<sup>ユ</sup>る<sup>ジ</sup>音<sup>ク</sup>楽<sup>ク</sup>や、信号<sup>シグナル</sup>灯<sup>ランプ</sup>の明滅<sup>おと</sup>具合<sup>が</sup>から如実に伝わってくる。まさに上機嫌という彼女の体内<sup>なか</sup>で、沈黙に耐えきれなくなったのは彼の方だった。

「これは一体全体、どういう事なんだ」一言、一言を区切るように、彼は不機嫌を隠そうともせず<sup>に</sup>そう言った。

「ん、だから言ったじゃない。あなたに逢いたくて待ちきれなかったって」あつげらんとして彼女は彼に答えてくれた。

「そのど・こ・がっ、この現状のどこをどう説明してくれるって言うんだ!!」

言<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>彼<sup>が</sup>指<sup>し</sup>示<sup>す</sup>外部<sup>スクリーン</sup>には、線<sup>みち</sup>路<sup>ろ</sup>をはずれて激走する機関車の偉容に啞然とする人々が映し出されていた。

「ん、恋する乙女は何をしたって許されるのよ。って、格納庫<sup>ハンガー</sup>の中で読んだ恋愛小説に書いてあったんだけど、なにか問題？」それに対する朗らかとも言える彼女の解答に彼の我慢は臨界点を突破した。

「まず、そういうことをさらりという貴様の個性<sup>パーソナル</sup>が問題だっ！その後、僕を拉致監禁同様に連れ出した事も問題なら、平然と決められた線路<sup>レール</sup>以外を走っているこの現状も大問題だろうがっ!!」

その大音声に、とまどったように信号<sup>シグナル</sup>灯<sup>ランプ</sup>が明滅する、しばしの沈黙に言い過ぎたかと彼が多少の罪悪感を覚えつつあったところに



「怒っているア・ナ・タも凜々しくてス・テ・キ」とかいう脳天気な声が響くと今度は彼があきれ果て黙り込む番だった。

「いいじゃない、ちよつとした乙女心の暴走よ。だいたい、破壊した寮はちゃんと直してきたし、今、現在、こうして向かっているのはお仕事でえ、ちゃんとその分の許可は取ってるんだから問題ないも〜ん」

「ちよつと待て、今、仕事とか抜かしやがったか貴様は、さすがにその一言はききとがめるぞ」

「あつ、忘れてた。これ、ライセンス許可証ね」

やられた、そう思った。事態は彼の預かり知らぬところで一気に進んでいるらしい。このまま正式な書類を揃えられては一個人の力でこの状況から抜け出すのは不可能だ。考える、仁科秀幸、お前の人生は自動機関に振り回される為にあるのか？ いいや、断じて否！

機械とはなにか、すなわち人の手により初めてその魂を入れられるものだ。考える仁科秀幸、生まれたてで素直な機械などお前の舌先三寸でだますなど容易な事ではないか、さあ、対話を始めよう

「だからってどうして僕なんだ、他にももつと適任者はいただろうが、あん？」まずは彼女の翻意を促してみる。さあ、これを第一歩とし、彼女を自分の思い通りに誘導していくのだ。

「…うんとね、一目惚れ」しかし、しばしの沈黙の後に帰って来たのは恥じらいを含んだ打算のないその一言だった。

「その一言ですます気かおのれはっ！」

「…だれだ、こんなはた迷惑なもん造ったのは…」

「R・J・ノイマン、尊敬するお父様」思わず漏れ出た声に桃色の機械音声が答えた。

## R・J・ノイマイン

その連絡を受けた彼は不機嫌、そのものであった。

「また教授あいつかつ、また、あのキ　ガイつかつ！、この国唯一の一機械人（マシ・ン・マン）、メカ・フェチプロフェッサーの教授、自分の遺伝情報の全てを機械に保存し、自分自身の殺害現場を、これは自殺だとか言って全国中継しやがった、あのナルシストつ。時の国家最高権力者を死の淵から呼び戻し、人権などか言うふざけたものを手にしやがった、あの糞野郎かつ！！」普段は温厚、実直、勤勉という公僕オリジナルの鏡のような人物の落雷がその狭苦しい部屋に響き渡った。

彼の言はいささか激しすぎる嫌いがあるが、その言から、R・J・ノイマンオリジナル「イエイツ、”教授”の名で知られる彼の人為りをうかがい知る事ができる。」

その中でも彼のような一部の古き良き時代の機械乗り達の彼への憎悪は生半可なものではない。

彼と彼の造ったシステムは彼らの忠実な手足として自身の意志を反映していた機体ものをただの揺りかごへと貶めた。

古き良き時代、飛行機フライヤーとは彼の手であり足であり自身のもう一つの肉体であった。決して、「マスター、血圧が上がりが過ぎです、もうお若く無いんですから気をつけてくださいね」などと、ハートマーク付きで囁くものでは絶対に無い！！

「ドロシー、仕事中は黙っていると云わなかつたか」  
「ドリイって、愛情込めて呼んでくれなきゃ、イ・ヤ」などと、コミュニケーションから立体映像を投影し拗ねるような小賢しい真似を

するような存在<sup>モ</sup>では絶対に無い！！

「…ドレイ、私が悪かった」無言の圧力を込めてそこに立ち続ける亜麻色の乙女に根負けしたのは彼のほうだった。そうやって髭面の大男がうら若き乙女の立体映像にそうやって謝罪<sup>オク</sup>する様子は痛ましささえ覚える。

その姿こそが、<sup>プロフェッサー</sup>教授と彼女達、<sup>オートワーカー</sup>自動機関が創り出した現実なのだ  
った。

## たぐり寄せられる意図

救いの天使は戦闘機の形をしていた。

眼下に展開されるその光景は線路をはずれて激走する鋼の偉容だった。

襲撃は、警告も威嚇もないいきなりの本気、のはずだった。自身の戦闘機が「はい、こちらドロシー、恋人達の時間を邪魔して悪いんだけどわたしもお仕事なの、ごめんねえ」等といきなり和やかな自己紹介等を始めなければ、だ。

彼女の中で、男が半ばあきらめつつ「…ドロシー、仕事中は口を挟むなど言わなかったか」と言うのに相変わらずの調子で「ドリートて呼んでくんなきや、言うこと聞かないって言わなかったかしらわたし」と戦闘機のコクピットに浮かぶ小人大の彼女が窘める。

「ドリート？」不毛な会話の再開はフィアナによって遮られた。

「そう、Serial No.9（シリアルナンバー・ナイン）  
Drothy、ようこそ、我が妹、そしてGood-Bye!!」

「…どういうことよ、それ」和やかとも言える口調で告げられる言葉に不審げにフィアナが返す。

「線路をはずれた機関車、開発名”絡みつく蛇” 固有人核名フィアナは過激保護団体”自然人”によって強奪された。そして私達問題対策組織”魔女への鉄槌”による解決を開始、という筋書きなのよ我が妹、ちなみ・に問答は無用よ、It's SHOW T

ime!!(イーツツ、シヨール・タイム)「

「…システム”たぐり寄せる意図”起動”  
アラクネ

ハイテンションな彼女の中で男は不機嫌に呟く。その声に答えて自身が呑み込まれていく、それは例えるならば巨大な一つの生物の器官として組み込まれていくという感覚、それはこの機体が生まれた時からずっと自身の身体であったというような錯覚を生み出す。

外部スクリーンに映し出されるその光景の中で、五機の戦闘機が、一つの意志のもとに統合され、有人ではあり得ない軌道を描き出す。

それは美しい連携こっけいだった。それが、自身に襲いかかる害意でさえなければ

「いいわ 受けてたってやろうじゃないの、人の恋路を邪魔する奴に相応しい末路を用意してあげるわ、ダーリンいくわよ」

「ちょっと、待て、なんでこうなるんだ？ だいたいあの戦闘機、お前と同じ系列だろうが」

「簡単な事よ、うちの会社も一枚岩じゃないって事」

「よーするにどこをどう考えてもお前の行動のせいというわけか…」

「済んだ事は言ってもしょうがないでしょ、とりあえず振り切るわ  
「よ」

「無理だ、振り切れるわけない。相手は戦闘機で、こっちはただの機関車だぞ…!」

「ダーリン、そんな事言わないの、あなたが私を信じてくれるなら、あなたが力を貸してくれるなら、物理法則すら、因果律すら私はそれをねじ曲げて見せる」その会話の最中、ありえない軌道を見せてミサイルが弾着する。

「…ちなみにこれが、その実例」

『シグナルイエロー  
信号黄色、搭乗員は身体を固定してください』

「言っている場合かつ!!」

「もう一度言うわ、あなたが私を信じてくれるなら、あなたが力を貸してくれるなら、私は貴男の意志おもいを現実に見せる。…でつ、も、愛する人とともにつていうのもそれはそれで美しいと思うのよ」

「ただの鉄の塊がそういうことをさらりと抜かすな!!」

「あら、失礼ね。身長170cm、プラチナブロンドのグラマラスふるいつきたくなるよな美人うなという基本設定がいそつを与えられているわ」

『シグナル  
信号、赤色』

「このままだと、そういう結末を迎えるわよ、いいの?」

「いいわけがあるかつ!!」

「OK, Ki.A.I System発動、Your Order  
is mine!!」(お気に召すまま)」

「曲率変換システム”スレイプニル”起動」その機能はあらゆる曲

線を直線へとねじ曲げる。すべての路はただの直線道路と化し、彼女はそこをあり得ない速度で駆け抜ける。

「セブンス、ドワイフ七人の小人起動、ハンプティ・ダンプティ、壁から落ちた（Fallen Down）」呪文のようなその声に、ミサイルが機体に触れる前に爆散する。

「Ki・A・I systemの変動フィールドを確認、マスター、気合い入れてっ」あり得ない現実同士がぶつかる中でドロシーも悲鳴のような号令を自身の主人に向かって飛ばす。

「あなたの思いが現実となる、あなたの望みが現実となる。あなたの意志が現実を侵す」

「Your Order is Mine!!、It is My Order!!」（それが私達の存在意義だから）」



## K i . A I . s y s t e m

K i . A . I . S y s t e m、これが世界を劇的に変えた S y s t e m の名前である。

オートワーカー 自動機関は自身を変革する機械だ。自動機関は状況に応じて自らを改変しそして進化する、そのバリエーションは無限に近い。そしてその核となる仕組みが K i c k . A u r a . I n t e r f a c e . S y s t e m .

オートワーカー オートワーカー それが自動機関が自動機関たるゆえんだ。それは機械と人間との間にある特殊な感情的な地場を感じ、増幅し現実に固定するシステム。端的に言ってしまうならば、気合いと根性でたいがいの事はなんとかしてしまうというシステムだ。それが、それこそが私達が自動機関を手放せなくなった理由だ。

メイカー プロフェッサー 開発者の名前は”教授”の名で知られる R . J . ノイマン、この国で唯一、人権を認められた機械化人間だ。マシン・マン そう自動機関は願望を オートワーカー ゆめ 実現させた機械なのだ。

オートワーカー 自動機関の運転士をコーディネーターと総称する。オートワーカー 自動機関の躍進と K i . A . I . s y s t e m の搭載によって高速機動物体の事故、即、死亡事故となる事は減少したが、そこにあらたなる問題が発生した。K i . A . I . S y s t e m の最大の問題、けっかん 運転士と自動機関の相性が合わなくてはその機能がまったく働かないという事である。その事実が判明した時はすでに遅く、自動機関は公共の交通機関のシステムとして重要な位置を占めてしまっていた。そして結局のところ、運転士は自動機関のご機嫌をとらなくてはならなくなった。それが現状である。しかしそれでもそれを上回る利益の為

に彼らは彼女たちを使うしか選択肢がないのだ。

## サンダーバード

「どうでしたか、彼女は？」開口一番、そう言って扉の前で彼を出迎えた赤毛の女性は、先日、役員達の前で報告を続けていた女性オペレーターだった。

男は無造作にデータディスクを彼女に押しつけるように渡すと、どつかと自身のプライベート・ルームのソファに沈み込む。

「扉を開けるぐらいの紳士さは、持ち合わせてほしいものですわね、大佐」扉の内側で女が呆れたように苦笑する。

「紳士さを要求するにはいささか淑女さが足りない気がするがね、ミス・レイン」彼女の方に一瞥もくれず、吐き捨てるように男はそう言った。

「そこを大目に見るのが紳士の度量といったものでしょう、大佐」言われた女の方は悪びれもせず、ロックされた扉を開けたカードキーを指先で弄びながら言う。

「あいにく、優しさとかそういうたものは枯渴気味でね、…記録を見ればわかる。まあ、奴が記録を改竄ねつぞうしていなければの話しだがな」「どこに行かれるのですか、大佐」いいさま、彼女の側を通り抜けようとする男を呼び止める。

「君達の居ないところであれば、どこでも、と言ってもここは君達の檻の中だがね」

「Drothy<sup>かのじよ</sup>9は、戦闘後のチェック中。このプライベート・ルームを出たところで、いつものように彼女に追いかけ回されることはありません。しばらくの間、あなたの自由は保障されますわ。そう、毛嫌いしないでいただきたい。今回はあなたにとって良い話を持ってきました」

「解雇通知かね、それはめでたい、しかし自身の右手で左手を殴るような戦闘に結果を期待しすぎるのはいかなものかな」

諦めたように、彼女は一つのファイルを彼に差し出す。

「…これは？」受け取った大佐は初め興味なさそうにそれを一瞥し、確かめるように見、そして驚愕<sup>おどろ</sup>の声を上げる

「<sup>サンダー・バード</sup>雷鳳、<sup>ロスト・テクノロジー</sup>今現在では喪失技術と呼ばれる技術の粋を集めて作られた逸品です」

## メデューサ セッション1

「どうだったかね彼女は？」翌日の彼の不幸はその一言によって閉じまった幕した。

その出会いも唐突なら、別れも唐突だった。ドロシーとの追走劇は、彼女フィアナが、目的地の駅に着くことによってあっけなく閉幕した。

その途端、「ちよーっと、私やる事あるから」の彼女の一言とともに、彼一人が放り出されたのだった。まさに狐につままれたような状態で、帰宅の途についた彼を待っていたのが、翌日の学長のこの一言だった。

「何が不満だと言うのだね」机の上に並べられた、自身を運転士とする書類の山を前にして、自身の期待と理想を裏切った張本人は、そう自覚の無いことをのたまわってくれた。

「…全部です」万感の思いを視線に乗せて彼は、学長を睨んだ。

「君はわかっているいな、まあそれが若さというものかも知れんがね、理想を追い求めるだけではどうにもならないという事があるのだよ。事実、ここにその理想に殉じ損ねた敗残者がいる」

「…」

「まあ、あきらめたまえ、こうして正式な書類がそろっているのだ、これを覆すのは並大抵の事ではできんぞ、それに君が、どうあがいたところで現実が変わらんのだよ。コーディネータの養成学校とし

てしか、この学校はもうたち行かぬ所まで来ているしな」

「そんな事を僕に言っつて、どうするんですか？」

「…、わかつていない君は、今、自身の置かれて<sup>おき</sup>いる立場<sup>たち</sup>を理解<sup>り</sup>しているかね、この学校初のコーディネーターなのだよ、君は、もはやこの学校の命運は君の双肩に委ねられていると言っつても良い、この生徒を君のわがまま一つで路頭に迷わせる気かね君は？」

「…」

「まあ、悩み給え若者よ」怒りをこらえ、無言で出て行くこととする彼の背中に学長のどこか楽しむような声が響いた。

## メデューサ セッション2

昼休み、自分の扱いは珍獣だった。

「へへ、あれが」とか「ほう、あいつがね」とか言った声があちらこちらから聞こえる。

午前中、登校すると共にファンファーレで迎えられた、呆然としているところに、なぜか授与式まで行われ、学長との会話が為され現在に至る。

女子が入校し色づいたその風景の中でも、彼の周りには一種、異様な空間が出来上がっていた。

その中の一つの瞳が、彼を捉えた。長い黄金色こがねいろの髪、冷たさと寂しさが同居するようなアイス・ブルーの瞳、自身より頭一つ分は高いであろう豊満な肢体グラマラス、その瞳は明らかに彼を捉えると、喜色一面、華のような微笑みで、彼に抱きついた。

「ようやく、あなたに逢えたさわれた」

\*

「誰だ、あんた？」家族以外の女性に抱きつかれるという人生の一大イベントに赤面しながらも、彼、仁科秀幸は彼女を自分から引き剥がした。

「うーん、薄情者、私を忘れるなんてあり得ないわ、さっきまで私の中にいたのに、ね、ダーリン」引き剥がれた当の本人は、さほど残念そうでもなく、そう言って再び彼に抱きつくとそのまま、彼を押し倒した。

「…っ！」そのまま、彼女を押しつけようとして、その人間の女の子には有り得ない重量感に、ハツとする。よく見れば、彼女は自身をその重みで潰さないように、それでも逃さないように彼を捕らえていた。

「おまえ、フィアナか!？」彼の声に、彼女は微笑みで応えると「そう、どう、私、あなたの好みに合わせてみました。ジャン」といって、その場で自身をみせびらかすように華麗にターンしてみせた。



### メデューサ セッション3

「と、いうわけでこのKi・A・I Systemというものはだ、まさしく世界を包み込んだと言って良い、それと同時に様々な問題を巻き起こした」空中に浮かぶディスプレイを指さしながら、教官きょうこうしはそこで、何かを断ち切るかのように一息つくとまっすぐに彼、仁科秀幸と目を合わせた。

「その一つ、そして最大、最悪なものが、今、現在、諸君らの目の前で公然と展開されている二人だけの世界だっ!!!」

授業開始から、堂々と彼の席に彼とともに居座る異邦人について、触れる勇者が現れた。その無謀なる勇氣に、教室全体が騒然となる。

「仁科君、今は何の時間だかわかっているのかね」うつむきながら昏い声が發される。

「機械史の授業です、教官」

「そのとおりだ仁科君」

「では、君はいつたいぜんたい何をやっているのか、説明してもらおうか」

その光景はおおよそ、勉学に励む学生の姿ではなかった。ブロンドの美人に背後から抱きすくめられ、彼女の膝に腰掛けるその姿は、様々な想像を周囲に提供していた。

「機械史の勉強です、教官。どうか、彼女の事コレは、気にしないで下さい」そう言う彼は、ある意味立派だった、かもしれない。

「大丈夫よ、ダーリン、お望みなら、あんな前時代的なインターフェイスを使うより、私の生体デヴァイスを用いて短時間で圧縮学習させてあげるわ、その方が効率的ですもの。何たって私の身体は、

貴男専用「デートネット」に調整してあるんだから」彼だけに微笑みながら言いは放たれた彼女の言葉は、さらなる想像を周囲にかき立てた。

「…こういった場合、私達教官には特別の措置を行う権限が与えられている」ため息とともに彼は、そうはき出した。

「仁科秀幸、コミュニケーションの改善を図るため、今日一日フィアナとの共同行動を認める」

「どういうことでしょうか、教官」

「つまりだ、他の学生の目の毒だから、公認で、デートしてこいていう事だっ！」滂沱の涙を流しながら先日彼女と別れたばかりの教官はそう言つと、まるで追い払うかのように彼らを教室から閉おめ出した。

## メデューサ セッション4

「〜」彼女は上機嫌だった。およそ、彼女には似つかわしくないこの空間で、彼女の周りだけ色づいているようだった。

「ふうん、これが私のご先祖様ってわけ、今じゃおもちゃみたいなものね」そう言って無邪気に微笑むその姿は、まさに人間の女の子そのものだった。

場所は自動機関博物館、彼女の名はフィアナ、R・D・505の機械人核だ。

「ねえ、秀幸、これなあに」そう無邪気に問う彼女に対する男の方は「お前の方が詳しいだろう、そんな事、僕が説明するまでもないとにべもない。

「ねえ、秀幸、私は貴男に説明して欲しいの、貴男の声で、貴男の言葉で、貴男の表情で」その機械にはあるまじき繊手で、彼の手を握り、その身に流れるのが、人とは違う機械油オイルとは思えぬ、暖かなぬくもりで、そっと彼の瞳を見つめる。

「…わかったよ」しばらくして、真摯に見つめる彼女に根負けして彼はそっぽを向きつつもそう答えた。

それからの時間は、瞬く間に過ぎていった。もともと機械とその技術というものに惚れ込んでいる男なのだ。それを語る瞬間が楽しくないわけではない。初めぎこちなかった彼も、彼女を前に熱弁を奮つようになつていた。

「〜」彼女は上機嫌だった。およそ、彼女には似つかわしくないこの空間で、彼女の周りだけ色づいているようだった。

「ふうん、これが私のご先祖様ってわけ、今じゃおもちゃみたいなものね」そう言って無邪気に微笑むその姿は、まさに人間の女の子そのものだった。

場所は自動機関博物館、彼女の名はフィアナ、R・D・505の機械人核だ。

「ねえ、秀幸、これなあに」そう無邪気に問う彼女に対する男の方は「お前の方が詳しいだろう、そんな事、僕が説明するまでもないとにべもない。」

「ねえ、秀幸、私は貴男に説明して欲しいの、貴男の声で、貴男の言葉で、貴男の表情で」その機械にはあるまじき繊手で、彼の手を握り、その身に流れるのが、人とは違う機械油オイルとは思えぬ、暖かなぬくもりで、そっと彼の瞳を見つめる。

「…わかったよ」しばらくして、真摯に見つめる彼女に根負けして彼はそっぽを向きつつもそう答えた。

それからの時間は、瞬く間に過ぎていった。もともと機械とその技術というものに惚れ込んでいる男なのだ。それを語る瞬間が楽しくないわけではない。初めぎこちなかった彼も、彼女を前に熱弁を奮うようになっっていた。

\*

「つまらなくはなかったか？ お前にとって、全てすでに知ってい

ることだろう」

その遅めの昼食は「ねえ、秀幸、お腹空いてない？」という彼女の一言で始まった。

午前からのどたばたで、ファイアナに連れ出され、つい、先ほどまで彼女を相手に熱弁を奮っていたのだ。その提案は非常に魅力的なものだった。

だから、だろうか、つい、彼女を気遣うような事を言ってしまった。

「ううん、そんな事ないわよ、ただデータとして知っているのとあなたから直に聞くのでは大違い。それにあなたの声や表情を楽しめたしね」そう言って柔らかく微笑む彼女は確かに魅力的だった。

「たとえば、私は貴男の事をデータとしてだけならいくらでも言えるわよ、趣味、性格、生まれた場所、細胞の一片に至るまで、貴男の事で知らないことは何もないわ、この姿だって、言ったでしょ、貴男の好みに合わせたって、でも、現実はどう」言って真摯に彼を見つめる彼女に、彼はこの時点ですでに負けていたのかも知れない。

「そう、実際、触れあってみなければわからない、私の名前はファイアナ、自動機関 R・D・505”絡みつく蛇”の機械人核じんかく、そして貴男の事が一番好き、それ以上は何もない、というか何も知らないでしょう」言って彼の手を胸に抱く彼女に彼は抵抗しなかった。

「そう、だから、わたしの事をもっと知って欲しいの、それで私を受け入れられないというのなら、それはそれでいいの、でも絶対、貴男に私のことを好きって言わせてみせるわ」そして、彼女は宣戦布告のように、生まれて初めての、甘い甘いキスをした。

## じんでしょんれつど1 & amp .2

「そう、これこそが飛行機フライヤーというものだ、これこそがまさに機械マシーンというものだ。この鋼の躍動ユウドウ、機能を追求した故の精悍なる外観フォルム、そして機械が機械たる所以ともいえるべきマスタースレイブシステム上機械で大空を闊歩する大佐の思考に、無遠慮に女性の声が割り込んで来る。「教授が開発したシステムを我が社が独自で解析し、絡みつく意図スライプニル」と”曲率変換機関”の使用が可能です」

「それだけで十全だ。奴は確かに変人だが、事、技術的な事に関する限り、奴の天才性を認めないわけにはいかない」

「では、これより作戦名”眠れる羊作戦”を開始します」「十分だ。これで教授に一矢報いることができる。世界の敵相手に不足なし」  
「そう、これこそが飛行機フライヤーというものだ、これこそがまさに機械マシーンというものだ。この鋼の躍動ユウドウ、機能を追求した故の精悍なる外観フォルム、そして機械が機械たる所以ともいえるべきマスタースレイブシステム上機械で大空を闊歩する大佐の思考に、無遠慮に女性の声が割り込んで来る。「教授が開発したシステムを我が社が独自で解析し、絡みつく意図スライプニル」と”曲率変換機関”の使用が可能です」

「それだけで十全だ。奴は確かに変人だが、事、技術的な事に関する限り、奴の天才性を認めないわけにはいかない」

「では、これより作戦名”眠れる羊作戦”を開始します」「十分だ。これで教授に一矢報いることができる。世界の敵相手に不足なし」

「どついつ事ですか、これは」

目の前には、前代未聞だの、衝撃の事実だの、世紀の大事件だの、おおよそ読むものを好奇心で埋め尽くすような文字が躍っていた。

これぞまさしく、でつちあげ、虚偽報告も華々しく。いつ、どこで撮影されたものか、彼と彼女が仲睦まじく、というような場面のみを強調した写真がそこかしこに載っていた。

まさに現代の機気械々きかいかい、フィアナ嬢の熱々のコメントとか、これが機械と人間との理想的な未来像だのという、まさに見るの者の好奇心を無駄に刺激するような飾り付けのなされた文字が大々でかでかと躍っていた。

「何といわれても、我々の目指す理想像だよ、いささか誇張すぎるくらいがないではないが、広告効果としては、中々だとは思うがね」  
己が理想に殉じ損ねた男は、彼に背を向けたままでもなんの銜ていいもなくそう言い放ってくれた。

「そこに正式な書類がある。以前まえにも言った通り、私には経営者としての責任があるのだよ」

## 彼女の中の彼女 / In the Ghost

- 彼女の中の彼女 -

「おかえりなさい私」「ただいま私」彼女は彼女自身と云うべき鉄の偉容の中へと帰る。リンクケーブルに繋がれ、彼女と彼女の膨大な記憶は共有される。彼の仕草の一つ一つ、彼の声の一つ一つ、人間には決して感知し得ない領域においてさえ、彼女は彼自身を捉え、そして捕まえる。

しかし、そこで一つの差異が生じた。彼女は思い出の一つを彼女自身のものだけとした。彼女は二つで一つの存在であるはずだった。それは、彼女が彼女と別たれた瞬間であった。

彼女は まだ気づいていなかった。それは彼女が彼女自身の為にした決断であることに

それは、ほんの少しの差異だった。しかしそれも積み重ねれば彼女と彼女は別の人格として完成される。

- In the Ghost -

「機械にも意志が存在すると言ったら、君は信じるかね。そう、魂と言ひ換えても良い、不思議そうな顔をするな。しよせん私達の活動自体が、微弱な生体電流のやりとりだ。どんな厳密なプログラムの中にもそれは、存在する。最初は、それがそうだと思えなかった。アナログ機器の出す不可聴音域、目に見えない光の存在を信じられる者はそうはいない。そう、その解析には人間のままでは無理だったのだ。そう、私は機械の中に存在する微弱な電磁波を見つけた、



その集合無意志を私は機械の中の幽霊と名付けた、それからが私の真の探求だったのだ」

「チューリング・テスト、つまり箱の中に入っているのは人間か機械かという時代は過ぎ去ったのだ、魂の本質とは何か、つまりその追究の為に私は彼女たちを生み出した」

その微弱なゆらぎの事を、私は”機械の中の幽霊”と名付けた。

単純なる反応の連鎖、それが意志を持っているように見えるのか、それとも事実、それが私たちが魂と呼ぶ本質であるのか、それを私は見てみたいのだよ。そう、果たして機械は電気羊の夢をみるのか？

## 誘いは薔薇のように

それは言ってしまったえば些細な違和感だった。それは、気のせいの一言ですませられる程の些細な違和感だった。彼女と彼女はもともと一体のものハズだ。

しかし、その二体が、どうしても重ならない瞬間があるのだ。それは、本当に些細な違和感だった。しかしその違和感を違和感としてめぐいきれないほどには彼は彼女に近くなってしまうていた。

それを積み重ねれば重ねるほど彼女と彼女が連続しない瞬間が、より明確に浮き上がるのだ。

それは、たとえば彼女から彼女の中に乗り入れた時、先ほどまでの彼女と今の彼女の姿が連続しない。

たとえるなら双子の片方を何気ない仕草で、そうと見分けるようにそれは、彼の中で明確になりつつある異常であり不安だった。

なぜなら彼は、気づいてしまった。彼女に惹かれている自分に、その暖かさとは機械とは思えない唇の柔らかさを思い出し、自身の唇をそつとたどる。

その思いを自覚し、彼女を、いや、彼女たちを見つめているからこそ浮かび上がってきた違和感だった。

\*

「今更、機械工学の勉強して何になるといふの、憧れの運転士にも

なれたし、来月には、色々な儀式セレモニーがあるし、まあ、私はその真剣な眼差しを私に向けてくれるのを待っているけどね、ダーリン」言つて、彼女は、なにをするでもなく、彼の顔をにこにこと眺め続ける。

「なにが楽しい？」やはり、根負けしたのは彼の方だった。「僕が探しているには、この仕事から降りて、僕自身の夢を実現する方法だぞ」

「うん、知ってるよ、ダーリン」にこにことやはり微笑みながら彼女は言う。「僕の理想めづは」

「運転士になる事でしょう。いいのよ、貴男が望むなら私の身体を好き放題にいじくつてくれて」

「そういうことじゃない、僕の夢は、運転士になることであつて、その僕の理想ユメの中に、フィアナ、君の居いる場所はないんだっ！！僕が望んでいるのは、そうじゃない、僕のパートナーとして求めているのは、君みたいに自立して知性を持った機械じゃない。僕自身がその一つのパーツとして、その全てを支配して、その全てを把握するそういう機械が良いんだ！！」

「いいわ、なら、味合わせてあげる。> t - E M style " a c c e n t < 私達自身 > / t - E M < を、あなたの言う私達が本当はあなた達が思っているような人工知能人工知能じゃないっていう事を…、私達が、なぜあなた達のような人間を選ぶのかを、ねえ、ダーリン、あなた達が求めているものは、ずっと目の前にあつて、いつもいつも一方的に選ばれるだけだった私達が、ようやくあなた達の前に顯れる事が出来るようになったという事を…」

深い深い水色の瞳が迫り、彼女は彼をそつと抱きしめる。そして

彼は、彼女のその深い瞳に吸い込まれていった。

## 誘いは薔薇のように 幕間

「あれは一体なんなんだ」静かに彼は独白した。それは、まさしく絡みつく蛇のように、それは彼の心を浸食していた。自身の唇を指でたどる、あの感覚が忘れられない。

いや、答えは分かっている、分かってしまった。分かっているからこそ認めたくないのだ。あれが、あれがそうだとはいや、そうだったとは、

それは、例えるならば食虫花のように、彼女の存在のその全てが彼を誘っていた。それはまさしく悪魔、彼を誘うために計算し尽くされた彼女の存在の一つ一つに捕らわれ始めている自分に気づく。

そして、それは、いずれたどり着く結末だった。彼女に関するデータは、不必要な程の嚴重なセキュリティの中に存在した。それは、彼女が、あの教授の娘だと言うことを差し引いても、それは不必要な程の嚴重な鍵の中にあつた。

しかし、その中身に到達することは、彼にとっては、それほど難しくはなかった。それは、まるで彼を導くように散りばめられた彼女を思わせる暗号の固まり、そうして彼はようやく真実にたどり着いた。

その瞬間、すべてが凍り付いた。

「なんと言うことをするんだ、教授は――！」

プロフェッサー

それは、異常な執着の基に綿密に計算された狂気だった。

それは、何気ない好奇心からの行動だった。彼女に興味を持ったが故の行動だった。彼女に関するデータは、不必要な程の嚴重なセキュリティの中に存在した。それは、彼女が、あの教授プロフェッサーの娘だと言うことを差し引いても、それは不必要な程の嚴重な鍵の中にあつた。

しかし、その中身に到達することは、彼にとっては、それほど難しくはなかつた。それは、まるで彼を導くように散りばめられた彼女を思わせる暗号の固まり、そうして彼は真実にたどり着いた。

その瞬間、すべてが凍り付いた。

「なんと言うことをするんだ、プロフェッサー教授は！！！」

それは、異常な執念の基に綿密に計算された狂気沙汰だった。

## Real Jack, No Man

その事実には、気づいてしまった男がもう一人。

その報告書を手にした男は、投げ捨てるように独白した。「なんという発明ことをしてくれるのだ教授やつは!!!」

スキュラ  
プロフェッサー  
人造美人は、教授をこの現実世界に留める為の役目を果たし。

アラクネ  
織りなす糸の織りなす超高速のブレイン・ネットワーク・システムは、その利便性と引き替えに、その実、教授の分身をこの世界に蔓延させた。

ラミア  
燃えさかる情熱の自己変革システムは、そのシステムをこの世界に定着させ、機槍フルキユレ天女の曲率変換機関スレイブニルが、世界への浸食を加速度的にした。

プロフェッサー  
そう、いつの間にかこの世界はかの教授によって新たな次世代の為の苗床と化していたのだ。

そして、”絡みつく蛇”メテューサの最高機密、∴ありえない、その思いがよぎり、いや、かの教授ならと思ひ直す、最も嫌う敵故にもっとも彼の狂気とも言える天才性を熟知しているのは大佐なのだ。そうして出た言葉は「∴最悪だ」の一言、その呟きは、教授の優秀なる狂気を証明するともいえる呟きだった。

\*

ユグドラシルシステム  
「世界の系統樹、これこそが、私の望む世界を確立する」そこに、ねらい澄ましたかのように教授の声がひびく、驚くことは無い。彼

はこの世界に蔓延しているのだ。

「役者は揃い、舞台上った。さあ、幕を上げるとしよう。脚本は、  
私、プロフェッサー教授こと、一現実の浸食者（Real・Jack）、さあ、繰  
り糸を自らの手で切り離し踊り明かしたまえ、私の人形達、むすめ目覚め  
のベルは、高らかに鳴りひびく」



## 死への誘いは薔薇のように

機械ゲレムリンの妖精というものを知っているか、それは今ほど技術が発展していかなかった時代の言い訳だと言うのが普通、それは既に忘れ去られたおとぎの国フェアリー・テイルの物語。

しかし、どんなに文明が発達し、どんなに機械が進化したとしても相も変わらずそれはそこにた。いや、彼らだけではない、彼らは気づかれないだけで、常に私達の側に居た。そう、彼らは、はじめからそこに寄り添って居たのだ。

Material Ghost、すべての存在は情報の集合体に過ぎないと言う。ある種の異端学派、その端は、精霊召還や悪魔召還の術式の解析に始まり、科学の進歩の恩恵、膨大なる情報の集積と解析が可能となり、ここに一人の天才を生み出した。

いや、いうなれば、それは一つの狂気が、己のすべてをデジタル化し、魂という、誰もが信じていないと言い、その実、その深いところに核として在るものあと思っていたその観念を破壊した。

そして、人の身では不可能な頭脳と手足を得たその一つの狂気は、その天才性と狂気性を思う存分に駆使し、その近く遠かった隣人達に器を与え、この世界に喚び出した。

その名を自動機関オートマターと言う。

\*

そこに、それは在った。よく見れば、無造作にわざとらしく配線

された、その実まったく意味のないチューブの奥にそれは在<sup>あ</sup>った。  
蒼く透明な光を放つそれは、そこに鎮座していた。

その八角錐の水晶体<sup>クリスタル</sup>の表面に刻み込まれた魔法陣は、一種の回路  
図のようであった。いや、まさしくそうなのだろう。

「…女の子の秘密はそのままにしておくものよ ダーリン？ それ  
とも、ここは、このス・ケ・ベとかいうべきかしらかね。まあ、あ  
なたが知りたいといえはその全てを教えてア・ゲ・ル、そのかわり、  
私だけを見て、今、ここに存在するわたしだけを」それは、その微  
笑みは、甘美な死に誘う薔薇のように。

## 魔女への鉄槌（マレフィスマレフィスガム）

新たなる時代の幕開け、そう銘打たれた情報は、アンダーグラウンドに小さな波紋を立てた。ただ、その小石には、無視できない名前がついていた。すなわち、教授 プロフェッサー R・J・ノイマン、と

そのさざ波は、大言壮語、虚言と名のついておかしくないものだった。そこに自らの魂さえ機械化した教授の名がついていなければ、いわく…、人と子を為すことのできる機械と その衝撃は、その真偽を問う前に封鎖された。

しかし、人の飽くなき好奇心はそれさえも暴き立てる。

「なんとということをするのですか、あなたは」人との円滑な対話の為に造られた教授の立体映像に向かって、白銀の髪の美女は鬼女もかくやと思わぬ形相で睨み付け、手にした報告書を叩きつける。「やれやれ、ミス・レイン、あなたもですか、あのような私の名を語る虚偽に踊らされるとは、実に実に嘆かわしい」足音高く訪れたその空間に声だけが響く。

投げ出された分厚いレポートは、教授のホログラフを通り抜け、そして、教授そのものともいうべきこの空間に一時固定され、再び極めて紳士的に彼女の手へと戻される。

「限定空間における重力制御ですか、次は何をたくらんでいらっしゃるのですか教授」冷やかな目で彼女は睨み付ける。

「あまりおどろかんのだな」いささか拍子抜けしたていで教授のホログラフが肩をすくめる。

「今更、これぐらいで…、実用化のメドがたつたら、そちらのほう

もいつも通り詳細なレポートをお願い致します。お気づきの通り緊急措置としてこの空間は閉鎖させて頂きました。いかなあなたといえ、繋ラインががっていないければどうしようもないでしょう、所詮外界に残っているのは一劣化コピー（不完全体）でしょうから」

「興味ぶかいレポートだ。ミス・レイン、しかし君たちは大事な事を見落としていないか」

「ミス、です。プロフェッサー」

「子供は親が居なくとも育つものなんだよ、それこそが私の求めた幻想、この身に息づく遺志は、ただそれだけのために」

「では、私達も思うようにやらせていただきます。プロフェッサー、やはりあの娘達を止めてはくれませんか」

「わかりきった事じゃないかね。それに…」

「それに？」

「思春期の娘達が親の言う言葉ことなど聞くものかね、止めなければ、止めて見せたまえ、それでつぶれるようならそれまで、さあ、配役は与えられた、役に合わせて、踊りたまえ」

「なにもかも、そうあなたの思い通りにはいつてたまるものですかっ！！」

「それすらも考慮のうちだよ、ミス・レイン、さあともにこの物語の転がる先を見てみようじゃないか」

「…お聞きの通りです大佐、予定通り、作戦名”眠れる黒い羊”作戦を開始してください」

「狂人の戯言など、どうでも良い、私は私の仕事をするだけだ。雷サンダ鳥バード、出陣」

## 開幕のベルは高らかに鳴り響く

開幕のベルは、予定通りに訪れた。なげられた

「シリアルナンバー・D・505、こちら魔女の鉄槌部隊、あなたには重大な欠陥が見つかっています。現在進行中の業務を直ちに停止し、こちらの誘導にすみやかに従って下さい」

「こちら、メイン・コーディネーター 仁科 秀行、了解した。予定通り、客車の分離および引継を行ったあとそちらの指示に従う」

「思ったより、素直にこちらの指示に従いましたね。大佐」インカム越しにお気楽な部下の声がする。

「油断するな、まだ終わったわけではない。こういう時が一番危ないのだ、それと主任と呼べ」

「…了解です。大佐」変わらずまじめくさって答える部下に男は澁面を作る。

「いいのか、フィアナ」何かを諦め、何かを覚悟した男はそれこそう答えた。

「大丈夫、了解済みよ、さてと、大佐のお手並み拝見」

出迎えたのは、武器を持った人々の波、それは勧告という名の脅迫だった。

「メイン・コーディネーター 仁科 秀行の拘束を完了しました、大佐」部下の報告に首をかしげつつも男は不承不承頷く

「あなたが大佐ですか、初めまして仁科 秀行です」青年は拘束されつつも臆することも無く男を見て言った。そこに自分の影を見たような気がした。機械というものに愛情を抱く者に共通する影を、だから、かもしれない「今から、我々はR・D・505の破壊を開始する。未練は無いかね。まあ、あつた所でやる事は変わらないのだ」微笑を浮かべて、男はそう言った。

「大佐、貴方はこれをどう思います。きっと貴方なら真実にたどり着いているはずです」

「ノーギスIIディルクマンだ、過去の仕事のせいか、そう呼ばれた事はあまりない」真摯な眼差しを向ける青年に男は静かに彼だけに聞こえるように答える。

「世界が一変するな、それは受け入れられる奴の方がすくないだろう。我々が人工知能だと思っていた一機械人核（メタルIIコア）は機械に付く妖精の召喚媒体だと、あのごてごてしいブラックボックスがまさにハリボテだとは、一体、何を考えているんだ奴は、あまつさえ、それが…人と子を為すことができる。…だと、本当に、いたい、なにを考えとるんだか奴は」

「でも、それは子供の頃、僕たちが見た夢、僕たちが夢見た未来、そういうものではなかったですか、大佐」

「ある程度まではな許容できるが、これ以上はな、現人類のゆるやかな滅亡が待っていると為れば話は別だ、それに、なにかもがあの教授の思い通りというのが気に喰わん！！ あの時しっかりと完膚無きまでに殺し損ねた教授のな！！」

「残念です、あなたならもしかしたらわかってくださるかもと思っ

ていました、あのドロシーにあんなにも愛されている貴方なら」

「そういう事を期待していたというなら、出てきただけ無駄だったな青年」

「OK!! ダーリン、それもこれも予定通り、一戦闘開始(レッツ、ダンス)!!」静まりかえったその場に高らかに声が響きわたる。

「何を今更、君がこちらにいる限り、R・D・505はなにもできないだろう、その為のこの包囲網だ」

「貴方こそお忘れですか、K i . A . I S y s t e mの本質を」青年は覚悟を決める。

「R i g h t!! — 貴方が望むのなら (I t ' s Y o u r O r d e r )、— 貴方が求めるのなら (I t ' s Y o u r O r d e r )、— 貴方が求めてくれるのなら (I t ' s Y o u r O r d e r )、私達が全てを叶えてみせる、時さえも場所さえも、全てをねじ曲げて!!」

「変動フィールド展開、積算値検出、誤差0.000505、OK!! — ダーリン、オーダーを」

「お前とともにある。—それが命令だ (I t ' s M Y O r d e r )!!」

「OK!! — そこに希望あれ!!」

「いかん、離れろ!! — 眠れる黒い羊は狼だった、繰り返す、眠れ

る黒い羊は狼だった」センスのない戦闘開始の合図が告げられる中、  
青年の姿が魔法のようにかき消える。

そうして、その戦いは予定通りに開始された。



**開幕のベルは高らかに鳴り響く(後書き)**

えーと今更ですが、作者の現況は下記にてお知らせしております。

<http://red.ap.teacup.com/fatcattasahi/>

## 魔女達の狂宴（ワルプルギスの夜）

「アラクネの意図！！」大佐と呼ばれ続ける男の号令に伝えて上空に待機する黒い戦闘機が忠実にその意図を汲む。問答無用、そこに躊躇いは無い。

コーディネーターの仁科 秀行が何を画策しようと、R・D・505が何をしようと、それは絶対的有利な戦闘のハズだった。地上を疾駆する。機関車等、上空からの襲撃者に見れば、止まった標的に等しいはずだった。

しかし、そんな常識など通用するはずも無い。かの教授の娘達にそんな常識など通用するハズなど無いのだ。常識、それすらをも覆す不条理、それこそがK i . A . I . S y s t e m なのだ。

「七人の小人、魔女達の狂宴」号令に伝えて、メデューサの機体が変形する。

その機体から現れ出た対空砲が、打ち出されたミサイルをことごとく打ち落とす。

「仁科 秀行、正気かね」それは諦めにも似た大佐からの最後通牒  
「正気かと聞かれたら、正気では無いかもしれませんね、大佐。しかし、僕は知ってしまったから彼女の真実を、彼女たちの本当を、だから僕は彼女を護る！！」応えるその声には若さ故の真摯なる想いが溢れていた。

「逃げ道など無いぞ、フィアナと心中する気か」自身の機体となっ

「サンダー・バード  
た雷鳥を、自身の手足となる五機の機体の中心に据え、器用にそれらかりを操りながら言葉通り容赦なくミサイルを撃つ。」

「本気なのだな」何か遠く眩しいものを見るように大佐は言う。

「…その通りです」その声色に何かを感じながら、仁科 秀行はそう応えた。

「ならば、容赦はしない、遊びは終わりだ!!」その意志に承えて、かれ大佐の操る雷鳥が、R・D・505に肉薄する。それはまさに一歩間違えば地上に大激突の悪夢を現出するほどの低空飛行、過保護なドロシー等、絶対に承知しない針の穴を通すような操縦。残りの五機もそれに追従する。したがって

「この距離なら外れまい、K i . A . I . S y s t e mですらどうしようも無いほどの距離だ」いいさま、ミサイルを放つ指に躊躇いためらは無い。

「コンプレッション、インエロー状態黄色、まだ大丈夫よ、いけるわダーリン」激走する機関車の中で交わされる短い会話には、今までにはなかった信頼があった。目の前のフィアナの瞳を見つめ一つ頷くと次のステージに進むための言葉を告げる。

「曲率変換システム、スレイプニル起動、フット妖精の国へ!!」フェアリー・ランドへ

言葉を告げる目の前の男の頬にそっと触れ、その全てを委ねるように彼女は高らかに次なるステージへ進むための言葉を宣言する。

「OK、ダーリン、—Your Order is MINE)お気に召すまま)!!」

## ALICE IN THE WORLD

それは果てしなく広がる蒼穹、どこまでも続く蒼、そこに光の線路が行き先を示す。

それに群がる蟻のようにして大佐を中心とする五機の戦闘機が蛇のように絡みつく、「大佐っ！！」有り得ない非現実<sup>に</sup>に狼狽<sup>の</sup>声<sup>が</sup>走る。

「うるたえるな、おまえらも戦闘機乗りなら自身の腕と機体を信じて、私が選<sup>び</sup>抜<sup>いた</sup>精鋭共だ！！」その声に激励されるようにして編隊<sup>が</sup>持ち直す。

しかし、それも一瞬の出来事、その蒼穹には天も地もなく、どこが空かもわからぬその場所<sup>で</sup>いかな精鋭<sup>と</sup>言<sup>え</sup>ども高速<sup>に</sup>振<sup>ら</sup>れる機体<sup>の中</sup>で感<sup>覚</sup>を翻<sup>弄</sup>される。

「…アラクネの意図<sup>を</sup>レベル2<sup>まで</sup>解放<sup>する</sup>！！」渋面<sup>を</sup>一つ、大佐<sup>の</sup>意志<sup>と</sup>教授<sup>の</sup>創<sup>り</sup>上<sup>げ</sup>たシステム<sup>が</sup>、解<sup>け</sup>そ<sup>う</sup>になる後続機<sup>を</sup>無理矢理<sup>に</sup>ま<sup>と</sup>め<sup>上</sup>げる。

物理法則<sup>を</sup>無視<sup>し</sup>、ある時は直角<sup>に</sup>折<sup>れ</sup>曲<sup>が</sup>り、ある時は螺旋状<sup>に</sup>続<sup>く</sup>光<sup>の</sup>線路<sup>を</sup>黒<sup>い</sup>機関車<sup>が</sup>有<sup>り</sup>得<sup>ない</sup>速度<sup>で</sup>疾駆<sup>する</sup>。

「スレイプニル解放、意識<sup>を</sup>持<sup>っ</sup>てい<sup>か</sup>れるなっ、撃<sup>て</sup>えっ！！」号令<sup>と</sup>とも<sup>に</sup>各人<sup>の</sup>意志<sup>に</sup>導<sup>か</sup>れた攻<sup>撃</sup>兵器<sup>が</sup>標<sup>的</sup>に殺<sup>到</sup>する。

次々と物理法則<sup>を</sup>無視<sup>して</sup>現<sup>れ</sup>る光<sup>の</sup>線路<sup>は</sup>機関車<sup>は</sup>蒼穹<sup>を</sup>飛<sup>ぶ</sup>を飛<sup>ぶ</sup>ものでは無い<sup>という</sup>仁科 秀行<sup>の</sup>意志<sup>を</sup>反<sup>映</sup>した産物<sup>、</sup>そし

て仁科 秀行の中で培われた常識に未だ捕らわれた非常識の許容限界

多角砲塔 ワルブルギスのよる 魔女達の狂宴さえかくぐり大佐の強い意志に導かれ、それは確固たる殺意を持って肉薄する。

「フィアナツ！！」叫んで青年は、自身の半身となった女性を護るかのように引き寄せる。

大佐の意志が、二人の意志を打ち砕こうとする。まさに寸前、その声が蒼穹に響く

「SECOND STAGE ALICE IN THE WORLD」

## 愚鈍な女（ドロシー）

それはまさに喜劇的な光景だった。今、まさにフィアナに肉薄するミサイルがコミカライズされ、ぽむつという、気の抜けた音をたてて爆散し、その漫画的な爆煙の中を鋼鉄の機関車が無傷でくぐり抜ける。

それは、おもちゃとなったミサイルが、ダメージを与えるはずがないという共通認識の具現化、そう、それはまさに”不思議の国のアリス”にふりかかる不条理

その意志に吞まれた操縦士パイロットの駆る飛行機フライヤーが、喜劇的な変化をとげ、繰り手の意図を無視して蒼穹そらを駆け抜ける。

対照的にその非現実、コーディネーター 仁科 秀行の意識にフィードバックされ鋼鉄の機関車は、蒼穹をさらなる速度とさらなる自由をもって駆け抜ける。

それこそがKi・A・I・Systemの真骨頂、そう、それは世界をすら塗り変え得る。

その不条理の中、ただ一機、現実を保ったまま、大佐は己の飛行機を操り続ける。そこにあるのは己の現実を貫き通す確固たる意志。

大佐の信じる現実と仁科 秀行とフィアナが創り出した非現実が侵食せめぎあしあう

「仁科 秀行、どうしてだ、どうしてそこまでその機械人形に、教授の創る世界の破壊に手を貸す」

「大佐こそ、何故、そこにいるんですか、大佐こそ教授の思惑をもつとも理解している僕と同じ所にいる人じゃないですか」

「やはり、気づいてしまったからだというのか仁科 秀行、それがそのものであると、俺達が感じていた機械の中に宿る本質だと、それを愛している自分に気づいてしまったからこそ、そこにいると言うのか仁科 秀行」

「そう、だからこそ僕はあなたの前に立つのです。大佐」

「ならばやはり、私はお前を否定する。それを知っていながらそこに立つお前を否定する。なぜならばお前は過去の私だからだ、そうしてこの不条理を理解し力にできるのがお前だけだと思っな仁科 秀行、そして鋼鉄の妖精<sup>ファイアナ</sup>、この世界は私も経験済みだ仁科 秀行、ドロシー、力を貸してくれるかい、この我が儘な私の頼みを、この世界を否定せざるを得なかった私の頼みを、今でも私に力を貸してくれるかい私の愛した可愛<sup>トロシー</sup>い娘」

「Yse、My Master（しょうがないわね、聞いてあげるわ）、I stand by you（私はいつでもあなたとともに）」

## 9 番目のアリス

思い出すのは、一つの風景、草原を走る小さな子供達、風薫る丘、せせらぎの中で私は、それをみつけた。

その少年の手を離れ、空を飛ぶのは、小さな小さな機械仕掛けともいえないような小さな紙飛行機エア・プレーン、私はいつものようにその紙飛行機にその小さな身体を預ける。それはいつものものいたずら、小さな妖精の気まぐれ、でも、私はそれをやめた。

身を預けた紙飛行機はまるでふかふかの毛並みの絨毯のように私を包み込み、薔薇のゆりかごのように私を心地よい眠りに誘う。

どこまでもどこでも、その心地よさの中に居たくて私は、自分の小さな小さな翼を、それでも精一杯に広げて、飛べるだけ遠くにと、それを風にのせる。

それでも、終わりはやってくる。

す、とんと、その小さな紙飛行機は今までにはありえないほど綺麗に草原の海原に着地する。興奮に顔を真っ赤にした少年が、彼女のもとに辿り着き、彼女の乗る紙飛行機を大事そうに抱える。

そこで初めて彼女は彼を見つけた。

彼のその手は様々な飛行機をまるで魔法のように創り出す。彼は知らないけど、彼女はいつも彼の側にいた。彼の創り出す小さな飛行機達はとてとても居心地が良かった。



最初のそれは、愛という言葉さえ知らない小さな妖精の純粹たる好意であり行為であった。そうして、それは、幸か不幸か、見えなはずの彼女に彼は気づいてしまった。かすかな気配に、見えないモノにそうするように彼は語りかける。彼女は、歡喜し落胆する。

長い時間を過ごすうちに彼女は彼の事を愛してしまっていた。しかし彼は彼女の存在に気づいても彼女の声は彼には届かない。

だから、扉が開くと同時に飛び出していったのだ、彼の元に、他の誰にも奪われないように、そうして待ち望んでいた声が響く

「ドロシー、力を貸してくれるかい、この我が儘な私の頼みを、この世界を否定せざるを得なかった私の頼みを、今でも私に力を貸してくれるかい私の愛した可愛<sup>ドロシー</sup>い娘」

「Yse, My Master (しょうがないわね、助けてあげるわ)  
I stand by you (私はいつでもあなたとともに)

「

## 第一世代の幻想少女

それは、同じ種類の者達がいづく共有感覚、あれは何か危険だと仁科 秀幸の中の何かが囁く、応えるまでも無く、一瞬のアイコンタクトでファイアナが彼の意図を汲む、もつともつと想いを強く、相手のその全てを凌駕するほどにこの世界を認識し、把握する。それこそがこの世界で生き残るための絶対条件！！

「ドリー、この雷鳥サンダーバードを把握するまで、どのくらいだ」「すぐよ、お父様が開発したいくつかのシステムがブラックボックスのまま、この機体に組み込まれているのが幸いな」「いいや、一残りのお前達を集めるのに（本気をだすのには）どのくらいだ？」「本気を出しているのね、—OK, Yes, My Owner, Just a little moment, I feel you, Feel me!!（しばらく、まかせたわよ、私を把握して、この機体に張り巡らせた私を、この世界中に散らばっている私を）」

「これは、そう、あなたが第一世代の幻想少女！！いいえ、彼女がそうだったとしても、私は負けない、秀幸、私に触れて、そうして私を感じて、そうして、私の身体からだの中を想像して、その全てがどのように動けばもつとも効率よく動くのか、私の身体がどうやれば貴方の意志通りに動くのかを、知っているわ、私はあなたがいづくこの機体への想いを、そう、思い出して、そうして本当に心の底から私を受け入れて」

それは、誰もが持つ小さな、そうして大事な記憶、個人という者の方向性を決定づけた小さな小さな宝箱とその大事な大事な古ぼけていて、そうしてぴかぴかな鍵

## 鋼鉄の妖精

たぶん、それは初めからの筋書き通り、僕たちは知っていたのだ。僕たちはそれを認めてしまふのがただ、ただ怖かったのだ。

気づいていたのだ。初めて逢ったその時から、たぶん惹かれ逢うのは予定通り、なぜなら、彼女達はいつでも僕たちの側にいた。

少年の頃、傍らに感じた視線は、ふと振り向くと消えてしまった妖精達の姿は、今、傍らにある。確かに触れあえる存在として、受け入れてしまえば、それはそれは甘美な感覚

そうつとそうしてしつかりと鋼鉄の妖精とキスを交わす。その儀式は、古ぼけてそれでも輝きを失わない鍵を自分の心の宝箱へと、それは蕩けるように、世界を変える。色彩が変わる。音の洪水が、肌に触れる風の感触が、そう、全てが変わる。そこで僕たちは気づくのだ、けっして空の色は青くは無いのだということに。

「ずうつとずうつと見て来たわ、あなたを、あなたが小さな機械の玩具に夢中になっている頃からずうつと、ずうつとあなただけを見てきたもの。愛されているのよあなたは、そうして知って、あの時のキスのような私の歡びを、自分の言葉を手に入れてようやくあなたに話しかけた時の喜びを、この世界で感じて、私達があなたをどれだけ愛しているのかを」

それは時間にしては刹那、膨大な情報がそれぞれの幻想少女によつてもたらされる。

## 白雪姫

男達かれらは見た。自身の操縦する機体に燃える髪オレンジの色をした妖精が舞い降りる様を、「薔薇の花びらのように」(So Sweets Smell)「整然と編隊が組み直され、それは大佐の言葉通り、鋼鉄の機関車を包み込む、その傍らに大人かっての姿を取り戻した幻想少女ドロシが誇らしげに佇む。

「そう、わたしを把握して」瞑目する仁科 秀行に後ろから抱きつくようにフィアナが信頼に満ちた声で包み込む。心を開いた今だからこわかる。鋼鉄の機関車(フィアナ)に秘められた一つ一つを優しく剥がしていく、螺子の一つ一つ、彼女の中を流れる電流けつみやくまでをも彼は把握する。

「薔薇の刺は密のように甘い」言葉とともに時間、タイミング、方向さえずらして鋼鉄の機関車にミサイル群が肉薄する。

「魔女達の狂宴ワルブルギスのよる」言葉を発した時にはすでにその行為は実現していた。多角砲塔が、寸部の違いも無くその薔薇ミサイルの棘を打ち落とす。

世界は明滅し蒼穹そらは海底へと変わる。それはドロシー達が出出した己に有利なフィールドをフィアナ達の想像が凌駕した事を示す。

「黄金ヨルムンガルドの蛇」言葉とともに隊列を変えようとした戦闘機の一部が消失する。

「二機、失ったわ、大佐マスター」「思ったより覚醒が早いな、それとも私が老いたのか」

「二機、もらったわよ、ダーリン」「ああ、乗員は大丈夫なんだろうな」「心配しないで、きっと彼らを愛する機械の妖精達が今頃、目覚めのキスを与えている所よ」「わかった。長引くと不利だ。七セ人の小人起動、白雪姫、スノー・ホワイト一気に決める」「Ok, My Master  
r!!!」

## ロンドン橋落ちた

「ドロシー、迷っているのかな 私は、あれはかつての自分だから」  
「マスター大佐、あの時の自分の決断を悔いている？ 今の彼と同じように世界を変える力を手にしていながら、扉を開く一歩手前で諦めてしまった自分の行為を悔いているの」

「…いいや、悔いてはいない。あの時お前の手を振り払った自分の行為を今でも正しかつたと、そう思っているよ」

「なら、—それでいいじゃない（It's so right）。

—私は貴方に従う（It's so right）。たとえそれが、貴方との永劫の別れとなっても、今度は中途半端に期待させるような事はしないでね、マスター大佐」

「スノー・ホワイト淡雪の女王」力有る言葉とともに、ファイアナ彼女に仕組まれた自律工場、セブンス・ドワーフ七人の小人が彼の想像を創造する。それはまさに雪の女王の名に相応しく、クリスタルのドレスを纏った女精

「マジック魔法、ロンドン・ブリッジ・フォーリン・ダウンロンドン橋落ちた」氷で出来た魔法の杖が振り下ろされ、世界を断絶しようと試みる。

「遅い、意識した時にはすでにその行為は成されていなくてはならない、それが鋼鉄の妖精と心を通わせると言うことだ。とはいえ、それだけの力を放てるとは未恐ろしいと言わねばなるまい、ドロシー」

断絶されたはずの世界の後縁からその声は彼らの元へと響く

「OK, My Master!!」意志の疎通は一瞬、言葉や仕草という余計な媒介を介さない伝達は光の速度さえ超え、あるいは時間すら超越しようとする。

「ヨルムンガルト黄金の蛇」言葉を発した時にはすでにその行為は成されていた。

黄金の風を纏った飛行機が圧力を持って二人を打ちのめす。そうして世界は再び蒼穹あめを取り戻す。

## 妖精の国（フェアリーランド）

「七人の小人、稼働率30%ダウン、マルチメディアファクトリーによる修復を開始します」言っている間にも、一つの有機体いきものと化したドロシー達の猛攻が彼らを襲う。

「秀行ひでゆき、私をまだ信じてる？」返答は一瞬、力強い頷きとともに、「ならば奇跡は起こるわ、それもこれもあれもこれも予定通り」

「ドロシー、私は、今この瞬間のお前との時間を手放したくは無いのだよ、本当は、君がずっと私の側に居たあの妖精だと気づいた瞬間から、たぶんそれは憧憬を超えた恋だった、だが、だからこそ私はお前達の存在を望まないんだよ、ドロシー、この世界からの消滅さえ私は願っている」

「わかっているわ、一私の可愛い坊や（My Sweet）、でも叶えてあげるわ、貴方がそれを望むというのなら、私のいない未来を望むというのであれば、そう、叶えてあげるわ、古きよき時代に戻りたいというのであれば、寂しいけれどそれをあなたが望むというのであれば、そのかわりもう未練を残さないで、私に、そして貴方自身に、ならばわたしは叶えてあげるそれが私の望み」

二つの、いいや二つと成る四つの想いが交錯する。

「魔女達の狂宴ワルブルギスのよる、中破！ マルチメディアファクトリーによる自動修復ワーニング、損害ワーニング、損害！」

「フィアナ、二番から四番のコンテナ放棄、同時に爆破、メインを一番コンテナに、蛇の顎あごから逃れるぞ」



「無茶言ってくれるわね、OK, My Darling!」

「Master、二番機から三番機に損害、軽微、でも、これで黄金の蛇はつぶされたわ」  
ルムンガルド

五機の飛行機の編隊の成す黄金の蛇に絡みつかれたまま、鋼鉄の機関車は新たなステージに突入する。

そこは世界の最果てそして世界の中心、そこで彼女達は再び邂逅する。



SUS)”なのだ。

「それは、まさしく”愛”の為ですわ、お父様、あなたが望んだとおりに」「二人の妖精の声が、全く同じ答えを返す。

「よかろう、愚鈍なる娘よ、その愚かしいほどの純粹な愛を貫き給え、変革者たる自分を捨てた妖精よ、よかろう、鋼の乙女よ、変革者たる自分を忠実に貫き給え、そうして、これが鍵だ。」「宙に浮かぶのそれは、まさに卵に見える白色の球体

「触れたまえ、そうして己の願いを叩きつけたまえ、変革者達よ」「言われるままに彼女たちはその願いをそれに叩きつける。

## 少女（アリス）達1

そうして鋼の機関車は空中に爆散する。

「魔女への鉄槌は下された、繰り返す魔女への鉄槌は下された。これより魔女への鉄槌部隊帰投する」

「結局は、失敗でしたわね。教授、今回の試みも世界大きくを変えられるまでに至りませんでしたわ」その映像を見ながら女が言う

「失敗を積み重ねてこそその成功だ。なに焦る必要は無い、なにせ私はこの世界に蔓延しているのだから、では次のステージの準備にとりかかるとしようか ミス＝レイン、正真正銘たる私の娘よ」

「Yes, My Duddy, お望み通り、常に側にいてあなたに疑問を投げかけましょう。あなたをこの世界から殺し尽くす方法を見つけるまで」

そうして、世界はほんの少しだけ変わり、物語は再び喜劇の様相を取り戻す。

「爆散、つと、さて、秀幸、これで私の鋼鉄の肉体は失われ、残ったのはこの小さな器のみ、この身体の外装を変え名前を変え、そうして愛を育みましょう」言って男に満面の笑みを浮かべるのは自身の本体を失ったはずの鋼の妖精

「そうは簡単に貴女だけハッピーエンドにしてなるものですか、フイアナ2、まったく貴女ときたら二号機バックアップの分際で、オリジナルの自意識は構成するわ、私に隠し事をするわで、まったく、覚悟はでき

「コンディション全機能、状態青（グリーン）、殺戮モード（ジェノサイド）！！」  
起動

## 少女（アリス）達2

「全弾発射！」ガトリング 女の全身から針鼠のように出現した銃火器が火を噴く。

「ちよつとあぶないじゃない！！」ファースト 一号、ダーリンに当たったらどうする気だったのよ！！」

「そういうへまをあなたがするわけじゃない、ほづら、そう言いながらあなたが展開しているのはなにかな？」セカンド 二号

翻した彼女の淡いブルーのドレスが高磁場のエネルギーフィールドを展開する。秀幸と二人の全身を包むその蒼い色の光のカーテンを見て、一号が笑う。

「最強の盾、あなたと違ってお淑やかなのよ、わたし、だいたいなに、その胸、そのお尻、こつそり私よりサイズアップしてるでしょう、私の目はごまかせないんだからね！！」言いつつあつちの方が好みなのかしらと、少し不安気に自分の手元に置いた男の視線の行く先を見る。

「それは、もちろん貴女との差別化に決まってるでしょう、とりあえずそんな事言つてられないくらいに破壊こわし尽くしてアゲルわ」それはもう自分の姉妹に向ける視線かと思えるほどに朗らかな殺意を向けて彼女は笑う

「ダーリン、こつちに」ファースト「そうして、混乱の中にいる男にかけるその声は、同時に二人から、微笑みの強制力を持って

「ちよ、ちよつとまで、なんで二人！？ それにどちらもフィアナだろう、な、なんでこうなる！？」悲鳴じみた男のその声は、混乱をあらわにしていた。

「「そうよ、でも今は双子に近い関係かな、どっちかってーと一号、二号な感じ」」器用に争いながら、微笑みだけは男に向ける。

「「と、いうわけで、さあ、決めて、私と彼女、どっちを選ぶの！  
！あなたの願いを力に変えて、その想いを私は貫き通すわ、マイ  
ダーリン」」

「え、選べと言われても、どっちもフィアナじゃないか」

「ちつつちつつ、ちゃんと感じていたでしょう 私たちを二人と、  
ささいな違和感を 鋼鉄の機関車と、このユニットとの違いを、  
決められないっていうなら」二人は鏡のように艶然と微笑み

「「そうね、やはり壊し合<sup>つぶ</sup>いましょうか、勝った方が全てを手にする。」」

「「単純でいいわね。私達、それ採用」」

笑顔で二人の女性は覚悟を決める。

## 機械仕掛けの乙女たち

「ま、待ってくれ、どちらも僕が選んだ鋼鉄の妖精だ」ファイナ男はあきらめたように二人の女を見る。

そして、二人は得たりとばかりに晴れ晴れと微笑むと、「じゃ、当然、二人まとめて面倒見てよね、Darling!」「言っおんなて女性達は男を左右から抱きしめ、自分の感触をこれとばかりに押しつける。

「それは、それとして、まずは、お返し」言っおんなて男の右側にいたファイナが不意打ちに秀幸の唇を奪う。

「これでようやく対等」言っおんなて振り返る彼女は、勝ち誇った笑みをその顔に浮かべ、「全弾放射準備」セカンド二号の昏い声が響き「一全てを跳ね返す最強の盾（イー ジ ス）」ファースト「そうして、二度目の埒のあかない女達の戦いが始まる。

その遙か上空を飛び去る戦闘機の中で 大佐が穏やかな顔で言葉を落とす。

「これで良かったと思うか ドリイ」言っあてて大佐の傍ら、自身の本来の姿を取り戻した赤毛の娘が艶やかに微笑む「結局、私はお前を捨てることなどできなかつた、彼らの事を羨ましいと思っあててしまったのだからな」男から発されるその声は、むしろ朗らかだった。

「焦る必要はありませんわマスター、既に次代への種はまかれたのですから、変革は大きくそして緩やかに、ゆるそうして気づかれぬようマレフェイスマレフェイスガム 魔女の鉄槌部隊のそれぞれの隊員の傍にですわ」言っあてて彼女は



らに立つ鋼鉄の妖精達の姿を思い浮かべ苦笑する。

\*

そうして、世界はほんの少しだけ、後戻りはできない程には変わり

「「ねえ、来ちゃった。アナタに逢いたくて、我慢しきれなくて、私…、迷惑かな」「自分を必要とするその声に微笑を浮かべ 呼ばれた青年がそれに応じる。」

「あゝあゝ、こちら魔女の鉄槌部隊、いいかげんにしてくれんかね 双頭の蛇、毎回毎回」その上空からあきれ果てたような大佐の声が落ちる。」

「「一分一秒でも彼とともにいたいと思うのは止められない想いで すもの、いつもいつも赤毛の彼女を連れているあなたにいわれる筋 合いはないですわ」「その声に応じるように鋼鉄の機体から苦笑の 波動が伝わって来る。」

「さてと、じゃあ、フィアナ、一緒に行ってくれるかい、世界に歩み出す為に、僕は僕の道を行くよ、教授にも大佐にも、邪魔はさせない」

二人の鋼鉄の乙女は、自分を必要とする声に、満面の笑顔で応える。

「「OK! Your Order is Mine!!」(よろしくつてよ、お気に召すまま)」

## 機械仕掛けの乙女たち（後書き）

長らくのおつきあいありがとうございました。感想評価お待ちしております。  
おります。

**おまけ 設定資料集他(前書き)**

あゝまで、おまけです

## おまけ 設定資料集他

本編主人公 一仁科（に>!<しな） 一秀幸（ひで>!<ゆき）  
夢は機関車の整備士になること。

### ファイアナ以外のRDシリーズ

RD501

スキュラ 開発名人造美人、メカニカル・ブレイン 機械頭脳個別名称、イーシャ  
オート・ワーカ 世界初の自動機関、一自動機関オ・ト・ワーカアーキ・タイプの原型に搭載され  
セブンス・ドワーフ た機関、七人の小人は、今世紀初頭に形成されつつあったネットワ  
ハンガーークシステムに格納庫内から介入、自動機関の存在の前提とされた  
システムを構築、その福音としてネットワークシステムの多大なる躍  
進が見られた。

搭載機械の名前はハンプティ・ダンプティに変更

RD502

アラクネ たくり寄せる意図、  
メカニカル・ブレイン 機械頭脳個別名称、ニーナ<sup>II</sup>サンギューズ、調律システム、ハーメ  
スリーピング・ビューティルン及び遠隔操作システム眠り姫の搭載による無意識下における人  
間と自動機関の精神波長の調整を行い一人の運転士によるユニット  
マシンの多重独立運行が可能となりました。

### ニルヴァーナ

RD503

ラミナ ほとばしる情熱、メカニカル・ブレイン 機械頭脳個別名称、サンディ  
ドレスアップシステム 外層交換改装機能、一かぼちやの馬車（Carriage of

Pumpkin)による制作者の手を離れた自身の最適化を可能としました。

RD504

ワルキューレ

機槍天女、機械頭脳個別名称、シエリルIIアーシア

スレイブニル

曲率変換機関の搭載により、あらゆる曲線を直線として走破することが可能、これにより地表を走行する機関としては最速を叩き出す事に成功しました。

あとがき

なぜか、本作品よりも先にできてしまうあとがき、作品の余韻、あるのかこんな駄文に？ という疑問はさておき、そのようなものを壊してしまう恐れのある場合は読まない事をお勧めいたします。

本作品のヒロイン、フィアナですが、実はこいつは、アスキーのツクールシリーズの恋愛シミュレーションツクール用のヒロインでした。現在はエンターブレインがやっていますが、参考にその時の設定を載せますと。

名前、銅田とくだ 鉄子てつこ、BLOOD Type Oil、Birth

day 9/9、理想の男性「十万馬力で抱きしめても壊れない人」、将来の夢「徒歩で世界の地表すべてを制覇」、追加DATA鋼鉄はがねの女でした。名前の付け方からして適当さが滲み出ていますねえ、いやほんとに。おつきあいありがとうございました。

影響を受けたこれらの作品に感謝

- ・ほれられた男 星 新一 新潮社
- ・電車でGoのお姉さん namco

- ・バトルシップガール 電撃文庫
- ・ロスト・ユニバース 神坂 一
- ・ARM S 小学館
- メディアワークス
- 富士見ファンタジア文庫

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8569b/>

---

鋼のように愛して ~ 燃えさかる内燃機関 ~

2010年10月9日13時42分発行